

あった。

私達が二十年九月自宅から連れて行かれたあと残された家族は、家を接収された為に住む家が無くなり知り合いの人達がたづねて来て私の家は接収の浮目に会わなかったので次々と集り子供六家族が六畳と四畳半の家に暮らして二十一年五月迄生活命からがら裸一貫で漸く帰国したとのこと。

戦争をした為に国民は如何に悲惨な苦勞をしたか。これはホンの一例に過ぎません。

今後絶対に戦争はするべきでない事を子々孫々に至るまで永久に伝えたいと念願する次第です。

台湾から引き揚げた母子家庭

東京都 中村 信子

隣り駅で一人暮らしをしている母を訪ねると、話はずんで、帰宅は十一時、十二時ともなってしまう。母は

世界のできごとに関心が強く、記憶力も衰えていない。

母の家を出る時、必ず手を握りあう。そして祈るこれが決して最後になりませんようにと。

今年八十六歳になる母は、台湾からの引き揚げ者である。明治二十八年、日清戦争のとき、台湾に渡った通訳の息子が私の父、明治三十五年台湾へ渡った夫婦の娘が私の母である。二人は、東海岸蘇澳の小学校で幼なじみであった。父が台北第一中学に在学中、女学生であった母と書店で再会、二人はドストエフスキーについて語りあった。「ドストエフスキーとりもった縁よ」と母はいう。

そのあと、母は東京で女子校五年に編入学したが、家が倒産したため、進学をあきらめ、台北に帰って静修女学校の国語と書道の代用教員となった。

昭和の大恐慌の初めに二人は結婚、曲折を経て、世界に二つとかいわれる蘇澳の天然炭酸泉を利用した清涼飲料水製造工場を継ぐため、祖父のもとに帰った。が三年のうちの昭和十年、父はその頃台湾で猛威を振るっていた流行性脳脊髄膜炎になって、半日で世を去った。六歳

四歳、二歳、生後四日月の子供を残して。母にとつてはあまりに突然な、十年にも満たない結婚生活の終りであつた。

十七年にしゅうとの祖父が他界したが、事業は順調のび、母は子供たちに「大望」ともいえるほどの期待をかけ「洋行でもなんでもしなさい」と言っていたものである。

ところが敗戦。五十万円の接収財産証明書の紙切れと共に、台湾をあとにすることになってしまった。

五十年間の台湾生活は内地の親戚との疎通を失わせ、母の弟も戦死して引き揚げ先がない。除隊した五人の日本兵が工場に住みこんで働いていたが、その中の大西氏が「妹が門司で大衆食堂をやっているの、とりあえずそこへ」とすすめてくださったのだった。

二十一年三月十九日に基隆港出発。鹿児島へ、そして門司へ。

旅館へ二泊したあと、どこも焼け跡で貸家など無かつた時代だったが、幸運にも露路奥の六畳一間の「軒家」に移ることができた。

門司に着いた翌日、母が真っ先にしたことは、子供たちの転校の手續きだった。「どんな境遇になつても、まずは教育」というのである。

音楽への道をあきらめた姉は、区役所に勤めたが、数日分の蘭米にも足りない月給であつた。日曜の朝、六時から売り出されるタバコの行列に並ぶのは、私たち子供の役目であつた。一人一個のタバコを買つては次のタバコ屋に走っていく。母がこれにわずかの上乗せをして売るのである。夜にはローソクのうすあかりのもとで手巻きタバコを作る。

姉はまもなく、京都で女学校を経営している友人の所へ、ピアノ練習をさせてもらう条件で住みこんだが、女中仕事をやらされただけのようだった。引き揚げ後、半年もしないのに生活は完全に行き詰まり、ついで私と妹が、女学校の小使いをしながら勉強が継続できるよう、京都へ行く話になったが、出発前夜になつて断わられ、結果的に一家離散をまぬがれた。

「両親揃つていても女学校どころじゃないご時世に、引き揚げ者の母子家庭がそこまで無理することはない」

という批判の中で、母は家賃を節約するために、引き揚げ者住宅に移ろうとした。大八車にささやかな荷物を積んで行ったその住宅は、真ん中の通路を挟んで、六畳の板間がハモニカのようにずらりと並び、隣りとの境界にはボロ布を下げていような覚束ないものであった。母は、いったん荷物を下ろしたが、若い娘が三人もいるわが家にはまったく不向きな住居、と判断した。

「戻りましょう。死んだつもりでもう一度がんばりましょう」

生活苦からくる過労と心労から、その頃の母は夜中にたびたび心臓発作を起こした。そのたびに妹と二人医院へ走っていったのであった。

学生生活も恵まれたものではない。配給では足りない食生活で、弁当の持てない日は校庭で水を飲んだ。なぜみんなが弁当を持参できるのか不思議であった。衣服にも不自由した。一着のみの上着は、洗濯すると乾いてくれないことがあった。ナマ乾きの服を同級生が目くばせしあうのを昂然と胸を張っているのである。

東北大学に行った台湾からの引き揚げ者のN氏などは、

真冬中、半袖シャツ一枚だけで講義を受けていた、と語っていた。

「豆炭の配達で門司の町なかをリヤカーをひいたときはさすがに恥ずかしかかったけれど、学業を続けられた私は幸せであった。蘇澳から引き揚げた同級生の半分は、親の病氣や生活苦から、勤めたりダンサーになったり、温泉街で闇タバコ売りや靴磨きをしたり、あるいは開拓団で荒地を開こんでいたのだから……」

母が食堂で稲荷ずしを売らせて貰えることになったので、学校から帰ると、私はニンジンやゴボウやゴマの入ったきれいな稲荷ずしをつくるのが日課になった。好きな仕事だった。

母は禁制の外国タバコも売るようになった。ある日、MPがジープで乗りつけてきたのだった。

「外国タバコを売っているだろう。持ってきたさい」母は証拠品のタバコを差し出した。

「処罰されるのを知っていないのか、なぜこんなことをする」

「子供たちを育てるためです」

「夫を呼んできなさい」

「死んでおりません」

M Pは通訳を通して訊問を重ねたが

「アナタ トテモ カワイソ デモ タバコウツテイ ケナイ」

と日本語で言い、母のタバコを没収もせずに帰っていった。

この話をきいた私は、一つの事件を思い起こした。インフレ苦の中、闇タバコ摘発を受けた老女が「それを取られたら生きてはいけない」とすがりついた。その老女を撲りつけて重傷を負わせたのが、事件の端緒となったのだったことを！

薄氷を踏むようなその日暮しの一年余が経って、家主が通りに面した家を貸してくれることになった。母が戸板一枚に石けんなどを並べてみたところ、物のない時代であったからすぐに売れた。その売上金を持って小倉の魚町に仕入に行く。置くはしから売り切れる。自信を持った母は食堂をやめた。

お米の弁当を持って学校にも行けたし、姉も京都から

帰ってきて英文タイピストになった。YMCAのピアノで練習している姉をみると、とても安らぎを感じる事ができた。

母が町をさまよう戦災孤児の兄弟を引き取ったのもその頃であった。

やがて店は時流にのって繁盛し、間口五間奥行十間近い大きな店になり、二階には洋裁店もこしらえた。私は学校から帰ると、試験中でも十一時の閉店まで必ず店番をすることにした。店番をしていると、つぎつぎと友人が訪ねてきて話はずんだ。時には関門海峡を渡って下関に仕入れに行く。潮風に吹かれながらイタリヤ歌曲など口ずさんでいると、苦勞など意識もされなかったものだ。

新制高校第一回の卒業生の就職状況はきわめて良かった。が求人はい両親健在という差別的なものであったから、私は働きながら夜間学校へ行く決心をして東京へ発った。上京後、当方で毎日二万円前後の売り上げのあった母の店は、あいつぐ税金の攻勢と借金の高利、家主との契約の不備、連帯保証人になった法律的無知などから倒産、

人通りの少ない小店に引き移った。五十歳近い母は、四時に起きて、モヤシ工場で重労働をし、昼は店番しながらレース編みなどの内職、そして夕食後は駅前の食堂で皿洗いの奥仕事をした。

妹や弟も年齢不相応の苦勞をしたが、雪だるま式に利息が増えて、借金の山は崩せなかった。引き揚げ後、ムリにムリに重ねて子供たちを進学させた後遺症の借財は、親子協力して十年以上もかけて、払い終ったのであった。厳しい中で、妹と弟が国立大学へ入ったのは母の喜びであった。妹は就職予定であったが、教師のたつてのすすめで進学した。

その後、母は上京して東南アジア学生寮で仕事していたが、七十歳の時、経済的自立のできる老後を目ざして書道教室を開いて独立した。母が育てた書道教師の応援を得て、いまなお、百人近い子供や婦人が通っていて、税金も支払えるようになった。

日曜には教会の方が車で礼拝の送迎を下さる。一週一度の医師の往診、二度のパートの家事手伝いもお願いして、とても上手に自分の老後の生活を充実させてい

る。来客も多く、そのつど手料理でもてなす献身的な母を見ていると、私もあのように生きられたら…….と思う。たった一人で引き揚げ後の生活を負った母の苦勞は、母自身が書いたとしても書きつくせるものではないであろう。

大人になって気づいたのだが、私は女学校を中退して母を助ける立場であったのだ。勉強は一生のものだから数年ぐらい遅れてもよかったのだ。母や弟妹への思いやりが足りなかったことが生涯の悔いとなって残っている。

軍人を含め外地へ出た数百万の同胞が引き揚げにいたった原因を考えると、日本が二度と、他国の領土や資源によこしまな欲心を抱いたり、飢える貧しい国もある中で、世界中から金をかけ集めるような浅ましいことに熱中してもらいたくない!と思う。

焦土の中から願った、世界の平和と人間平等の繁栄は、必らず人類の達成しなければならない課題のはずだ。私たちの国、日本は、その人類の理想に大きな貢献をすることはできないのであろうか。もう一度、敗戦の原点に

立って考えてみたいものである。

苦難の日に学ぶ

東京都 土屋 セツ子

国家総動員令が出て、退職が許されず、たつて望むならば、懲戒免官を覚悟で、退職願を提出するようにとの校長の言葉に驚き、退職を断念し、急遽、大きな防空壕を構築して、お手伝いさんと、あわてて九州から呼び寄せた夫の姪に、八歳を頭に一歳までの幼児を託して勤務していた。幼児の一人が、防空壕内で失神したとの電話で飛んで帰ったこともあった。続いて、幼児家庭強制疎開令が出たので、お手伝いさんを家に帰し、姪と四児を三峽という山里に疎開させた。依然として退職は許されないのです、毎朝、未明に起きて家事を終え、台車発着所に駆けつけ、一人の青年の押す台車にひとり乗って、溪谷にかかる鉄線橋を飛ぶように渡り、鶯歌の町に、そして、台北にと往復四時間もの通勤をした。鉄線橋を飛

ばす時は、万一のことまで覚悟した。四か月ほどすると、校長が、戦況が少し落ちつくまで休むようにとおっしゃって下さったので、しばらく休ませていただいた。決死の通勤はしないですんだが、試験はいよいよ厳しく、三女佳子を失ってしまったのであった。

疎開先の家、陳家の主婦のおかげで、食事也十分でみな元気であったのに、佳子の元気がないのに気づき、すぐ疎開病院で診ていただくと、先生は用心のためと輸血をされた。五時間ほどして、又、先生は、前より多い目に輸血をされた。すると、急に苦しみ出し、寝ずの看護も空しく翌日のお昼過ぎに亡くなってしまった。せめてもの慰めは、亡くなる時の姿で、ようすが少し落ちつきほっとしていると、急にかわいらしい声で、歌を歌い、しばらくして歌をやめ、小さい右手の人さし指で天井をさし、嬉しそうな顔をしたので私は治ったのかと思ひ、院長室にお知らせに上がろうとすると、佳子は手を下げ同時に、目を閉じてしまった。私は佳子の手をひいて連れて行かれた方の姿を想像して悲しみに堪えたのであった。五十日して終戦、帰北、かかりつけの先生にお伝え